

南伝上座部における縁起説と輪廻の関係性

志智 昭良

はじめに

本稿は、南伝上座部の代表的論書であるブッダゴーサ (Buddhaghosa: 生没不明) 著『清浄道論』(Visuddhimagga: 以下 Vism.) と、Vism. に影響を与えたとされている『無碍解道』(Paṭisambhidhāmagga: 以下 Pts.) における縁起説と輪廻説の関わりを論じ、その思想的変遷を示すものである。

十二支縁起としての縁起説は、輪廻を示すものであり、アピダルマでは三世兩重の縁起として確立した。三世兩重の縁起とは、十二支縁起を過去世における因(無明・諸行)、現在世における果(識・名色・六処・触・受)、現在世における因(渴愛・取・有)、未来世における果(生・老死)に分類し、無明を根本とする有情の三世に渡る輪廻を示すものである。三世兩重の縁起説では、「諸行」と「有」は業と解釈され、因となり果報をもたらす業報思想をもって輪廻が示されている。

しかし、仏教の根本思想ともいえる無我説の立場から輪廻説を検討するとき、輪廻の主体を担うものは何かという問題が生じる。つまり、どのように無我輪廻を成立させるのかという問題である。部派仏教では、このような問題をどのように解決していったのか。本稿では、このような問題への足掛かりとして、南伝二論書における縁起説と輪廻の関係性を考察する。本稿で取り上げる南伝二論書の縁起説は、Vism. では XVII 慧地品 (Paññābhūmi-niddesa) に説かれ、Pts. では大品 IV 智論 (Mahāvagga, IV, āṇakathā) に説かれる。輪廻説は Vism. XVII 慧地品の「諸行」と「識」支分において説かれ、Pts. では大品 VI 趣論 (Mahāvagga, VI Gatikathā) において「名色」と「識」の関係で輪廻が説かれる。このように両者の転生が説かれる支分には相違がある。本稿では、両者がどのように縁起を解釈し、輪廻説を説明していくのかを示していく。また、Pts. 智論と趣論の縁起説の関係性は本論で説明していく。

南伝上座部の縁起説に関する先行研究は、Vism. の縁起説を中心としたものが多く、林寺 [1998]、

¹ Pts. は、『小部』(Khuddaka Nikāya) 蔵の經典であるが、論母を設けるなど論書性格を有しているため、本稿では論書と位置付ける。Pts. の成立に関して、水野 [1997a: 3-83] は、『法集論』(Dhammasaṅgani)・『分別論』(Vibhāṅga) に説かれるパーリ独自の心作用が、Pts. に説かれるものよりも発展していることを根拠に、一般的な經典と初期論書の間に成立したと指摘する。

馬場 [2003a] [2003b]、浪花 [2008 : 313–360] などが挙げられる。林寺氏は、Vism.の三輪転の縁起説から縁起支解釈に着目し、特に「識・名色」支分の解釈における問題を扱っている³。馬場氏の研究も縁起支解釈に着目したものであり、Vism.の縁起支解釈が『分別経』（*Vibhaṅga-sutta*）→『分別論』（*Vibhaṅga* 以下 *Vibh.*）の流れにあることを指摘している。浪花氏の研究は、Vism.の縁起説と諸註釈・復註との関係や、南伝上座部の縁起説を総合的に扱ったものである。これらの先行研究によって、南伝上座部の縁起説や Vism.における縁起説は多くの部分が明らかになっている。しかし、従来の研究において Vism.の縁起説から窺える輪廻観と Pts.趣論から窺える輪廻観を比較し論じたものは管見の限り見当たらない。

そこで、両者の縁起説を比較するとともに、転生に関わる支分の相違点を縁起支解釈という視点から考察していく。そして、最後に Vism.において無我輪廻がどのように説かれているのかを考察する。そのために、第1章では本稿で取り上げる二論書の縁起支解釈を取り上げる。続く第2章では Pts.VI趣論の輪廻に関する記述を取り上げ、縁起説との関係性も踏まえて輪廻説との関わりを考察する。第3章では、Vism.慧地品の輪廻に関する記述を取り上げる。第4章では、第3章を踏まえて Vism.における無我輪廻を考察する。なお、Pts を検討する際は、適宜『無碍解道註⁴』（*Saddhammapakkāsini* 以下 PtsA）を参照する。

1. Pts.と Vism.における十二支縁起説

本章では、Pts.智論の縁起説と Vism.慧地品の縁起説を検討し、転生に関わる縁起支分の解釈を示す。

はじめに Pts.智論の縁起説を検討していく。Pts.智論は、七十三種の智を詳説する章であり⁵、縁起説は「法住智」の説明で説かれる。ここでは、「縁の把握について慧は法住智であるとはどうしてか⁶」に対して、無明から老死までの十二支を用いて、縁起を所依 (*thiti*) ・因 (*hetu*) と因所生 (*hetusamuppanna*) ・縁由 (*paṭicca*) と縁由所生 (*paṭiccasamuppanna*) ・縁 (*paccaya*) と縁所生 (*paccayasamuppanna*) の観点から論じ、縁起支の前後が縁となることを示している。そして、そのまとめとして二十行相の縁起説が以下のように説かれる。

² 三輪転の縁起説とは、「無明・渴愛・取」を煩惱輪転、「諸行・有」を業輪転、「識・名色・六処・触・受」を異熟輪転とする縁起説である。Vism.や Vibh.では、本稿で取り上げる Pts.二十行相の縁起説の説明のあとに三輪転の縁起説が説かれる。

³ 詳細は後述する。

⁴ 『無碍解道註』は、Mahānāma 著の『無碍解道』の註釈書で、5世紀後半から6世紀前半には成立していたという。また、Vism.をはじめとするブッダゴーサ著の註釈書からの引用が認められる。Cf. 森 [1984 : 554]

⁵ 水野 [1997a : 190]

⁶ [Pts : 50,1–2]

katham paccayaparigahe paññā dhammaghitiñāṇam?

前〔世〕の業有における、愚痴が無明であり、取り組み（努力）（āyūhanā）が諸行であり⁷、欲求が渴愛であり、取得が取であり、意思が有である。前〔世〕の業有におけるこれら五法が、現世への結生の縁である。現世における、結生が識であり、入胎が名色であり、淨が処であり⁸、接触が触であり、感受が受である。現世の生有におけるこれら五法が、前〔世〕に為された業の縁より〔生じた果〕である⁹。現世で諸処は成熟するから¹⁰、愚痴が無明であ

⁷ [PtsA : 241,12–20]

āyūhanā saṅkhārā 'ti, taṃ kammaṃ karontassa purimacetanāyo. yathā, 'dānaṃ dassāmi' 'ti cittaṃ uppādetvā, māsaṃ 'pi, saṃvaccharaṃ 'pi, dānūpakaraṇāni sajjentassa uppannā purimacetanāyo. paṭiggāhakaṇaṃ pana hatthe^A dakkhiṇaṃ paṭiḥhāpayato cetanā bhavo 'ti vuccati. ekāvajanesu vā chasu javanesu cetanā āyūhanā saṅkhārā nāma. sattaṃjavane cetanā bhavo. yā kāci vā pana cetanā bhavo, taṃsampaṃyuttā āyūhanā saṅkhārā nāma.

^A hatthe VRI h' ettha PTS.

[和訳]

取り組み（努力）が諸行であるとは、その業を為す者の前の意思である。例えば「私は布施を与えるであろう」というような発心をして、一月でも一年でも諸々の施物を用意している者に生じた前の意思である。さらに、〔布施の〕受者たちの手に施物を置いた者の意思が有であると説かれた。或いは同一の引転（āvajjana : 意識を引き起こす作用 後註39 参照）を持つ六つの速行における意思が取り組み（努力）であり、諸行と名付けられる。第七速行（後註25 参照）における意思が有である。或いはさらに、なんであれ意思は有であり、それに相応する取り組み（努力）が諸行と名付けられる。

⁸ [PtsA : 241,36–242,7]

pasādo āyatanā 'ti yo pasannabhāvo, idaṃ āyatanāṃ jātigahaṇena ekavacanāṃ kataṃ. etena cakkhādāni pañcāyatanāni vuttāni. "pabhassaraṃ idaṃ, bhikkhave, cittaṃ, taṃ ca kho āgantukehi upakkilesehi upakkiliṭṭhaṃ" 'ti ettha bhavaṅgacittaṃ adhippettaṃ, 'ti vacanato idhāpi manāyatanassa vipākabhūtaṃ, tassa ca kilesakāluṣṣiyābhāvena pasannattā pasādavacanena manāyatanāṃ pi vuttanti vedittabbaṃ.

[和訳]

淨が処であるとは、およそ清浄なる存在がこの処である。生を含意するから単数になっている。これによって眼などの五処が説かれた。「比丘よ、この心は輝いている。そして、それは実に外来の汚れによって汚される^A」というこの〔経〕では、〔心は〕有分心（bhavaṅgacitta）を意味している^B）という〔註釈の〕言葉から、ここでも意処は異熟の状態であるから、またそれ（意処）は煩惱による濁りがないので清浄であるから、「淨」という言葉によって意処も説かれていると知るべきである。

浪花 [2008 : 593] によると、色法の分類で、淨色（pasāda-rūpa）に眼などの五根が配当されている。

^A [AN IV : 10,5–6]

pabhassaraṃ idaṃ bhikkhave cittaṃ taṃ ca kho āgantukehi upakkilesehi upakkiliṭṭhaṃ ti.

[和訳]

比丘よ、この心は輝いている。そして、それは実に外来の汚れによって汚されるという。

^B [ANA : 60,9]

navame pabhassaraṃ ti pañcāraṃ parisuddhaṃ. cittaṃ ti bhavaṅgacittaṃ.

[和訳]

第九において輝いているとは、白く清浄にである。心とは、有分心である。

⁹ [PtsA : 242,10–14]

idhupapattibhavasmiṃ purekatassa kammaṃ paccayāti paccuppanne vipākabhavo aññajātiyaṃ katassa kammaṃ paccayena pavattantīti atho.

[和訳]

現世の生有における前〔世〕に為された業の縁より〔生じた果〕であるとは、異熟有である現在において、過去の生で為された業の縁によって〔これらの五法が〕転起するという意味である。

¹⁰ [PtsA : 242,14–15]

idha paripakkattā āyatanānaṃ 'ti paripakkāyatanassa kamma-karaṇakāle mohādayo dassitā.

[和訳]

現世で諸処は成熟するからとは、成熟した処を持つ者が業を為す際の愚痴などであると示された。

り、取り組み（努力）が諸行であり、欲求が渴愛であり、取得が取であり、意思が有である。現世の業有におけるこれら五法が、未来〔世〕への結生の縁である。未来〔世〕への、結生が識であり、入胎が名色であり、浄が処であり、接触が触であり、感受が受である。未来〔世〕の生有におけるこれら五法が、現世で為された業の縁より〔生じた果〕である。以上のこれら四つの略説において三時における二十行相による三相続の縁起を知り、見て、認知して、通達する。これは知られたという意味では智であり、了知という意味では慧である。それゆえ、「縁の把握についての慧は法住智である」といわれる¹¹。

このように二十行相では、「無明・諸行・渴愛・取・有」の五支を業有（kamma-bhava）、「識・名色・六処・触・受」の五支を生有（upapatti-bhava）として、「生・老死」を除いた十支分が取り上げられている¹²。そのうえで、

¹¹ [Pṭs I, IV : 52, 19–36.]

purimakkammabhavasmiṃ moho avijjā, āyūhanā^A saṅkhārā, nikkanti taṇhā, upagamanam upādānam, cetanā bhavo; ime pañca dhammā purimakkammabhavasmiṃ idha paṭisandhiyā paccayā. idha paṭisandhi viññānam, okkanti nāmarūpam, pasādo āyatanam, phuttho phasso, vedayitam vedanā; ime pañca dhammā idhupapattibhavasmiṃ pure katassa kammassa paccayā. idha paripakkattā āyatanānam moho avijjā, āyūhanā^A saṅkhārā, nikkanti taṇhā, upagamanam upādānam, cetanā bhavo; ime pañca dhammā idha kammabhavasmiṃ āyatim paṭisandhiyā paccayā. āyatim paṭisandhi viññānam, okkanti nāmarūpam, pasādo āyatanam, phuttho phasso, vedayitam vedanā; ime pañca dhammā āyatim upapattibhavasmiṃ idha katassa kammassa paccayā. iti ime catuṣaṅkhepe tayo addhe vīsatiyā ākārehi tisandhim paṭiccasamuppādam jānāti passati aññāti paṭivijjhati. taṃ nātathenañānam, pajānanatthena paññā; tena vuccati-‘paccayaparaṅgahe paññā dhammatthitānam’.

^Aāyūhanā PṭsA. āyūhanā Pṭs.

¹² 浪花〔2008 : 340〕は、「生・老死」支分が含まれていないことに関して、二十行相に数を合わせるために省略したものだと述べている。ただ、註2で示したように、Vism.の三輪転の縁起説においても「生・老死」支分は省略されており、何らかの意図があるように思える。PṭsA.では、十二支縁起によって二十行相を理解する理由を以下のように示している。

[PṭsA : 242, 18–32]

“katham pana dvādasahi paṭiccasamuppādaṅgehi ime vīsati ākāra gahitā honti?” ‘ti. ‘avijjā saṅkhārā’ ‘ti ime dve aññatthetuyo sarūpato vuttā. yasmā pana avidvā paritassati, paritassito upādiyati, tassūpādinapaccayā bhavo, tasmā tehi dvāhi gahitehi taṇhūpādāna-bhavā ‘pi gahitā ‘va honti, paccuppanne viññāna-nāmarūpa-salāyatana-phassa-vedanā sarūpato vuttā yeva. taṇhūpādāna-bhavā paccuppannahetuyo sarūpato vuttā. bhave pana gahite tassa pubbhāgā taṃsāmpayuttā vā saṅkhārā gahitā ‘va honti, taṇhūpādānagahaṇena ca taṃsāmpayuttā, yāya vā mūlho kammam karoti, sā avijjā gahitā ‘va hoti. anāgate jāti jarāmaraṇam ‘ti dve sarūpeṇa vuttāni. jātijarāmaraṇagahaṇen’ eva pana viññānādāni pañca anāgataphalāni gahitān’ eva honti. tesam yeva hi jātijarāmaraṇāni ‘ti evam dvādasahi aṅgehi vīsati ākāra gahitā honti.

[和訳]

また、「十二の縁起支分によってどのようにこれら二十行相が把握されるのか。」という〔質問がある〕であろう。「無明・諸行」という二つの過去世の因は〔十二支縁起では〕それ自体として説かれた。さらに、無智なる者は悩み、悩むものは執取る。その「取」を縁として「有」がある。それゆえ、把握されたその（無明・諸行）二つによって、「渴愛・取・有」も必ず把握されるのである。現在世の「識・名色・六処・触・受」は、〔十二支縁起では〕それ自体として正に説かれた。現在世の因である「渴愛・取・有」は〔十二支縁起でも〕それ自体として同様に説かれた。「渴愛・取・有」は、現在世に〔果をもたらす。〕さらに、「有」を把握するならば、それ（有）の前〔世〕の〔対応する〕部分が、或いはそれと相応する〔諸行〕が「諸行」であると必ず把握されるのである。また、「渴愛・取」の把握によって、それと相応する〔無明〕が、或いは、それ（無明）ゆえに愚かなになった者が業を為すというような。そのような「無明」が必ず把握されるのである。未来世の「生・老死」という二つは〔十二支縁起では〕それ自体として説かれた。さらに、「生・老死」の把握によって、同じく「識」などの五つの未来の果が必ず把握されるのである。なぜな

- ・ 過去世の業因としての業有
- ・ 現在世の業果としての生有
- ・ 現在世の業因としての業有
- ・ 未来世の業果としての生有

と分類し、二十支分を以て有情の輪廻が無限に続く事を示している¹³。二十行相では、諸行は取り組み（努力）（*āyūhanā*）、識は結生（*paṭisandhi*）、名色は入胎（*okkanti*）を指している¹⁴。識と名色の関係における時間的な同異などが説明されていないので、名色は五蘊若しくは四無識蘊を指していると考えられる。また、四つの略説（*catusaṅkhepa*）は、過去・現在の二因と現在・未来の二果を指しており、有情の輪廻が業と異熟の因果関係によって限りなく続いていく様を示している¹⁵。このように、二十行相の縁起説は特殊な縁起解釈をしている。

次に、Vism.の縁起説は複数の論書の影響を受けており¹⁶、先述したように、その縁起支解釈は Vibh.の影響を受けているという¹⁷。Vism.では、諸行は「福行・非福行・不動行・身行・語行・心行¹⁸」として、識は「六識¹⁹」として、名色は「受・想・行」の三蘊と四大種並びに四大種所造色²⁰として解釈される。また諸行は、「無明を縁として諸行あり」の詳説では、無明によって「福・

ら、これら（生有の五支）には「生・老死」が〔含まれる〕からである。このように、十二支によって二十行相が理解されるのである。

PtsA によると、十二支を三世に配分した際に、過去世の業因である「無明・諸行」を理解することによって現在世の業因である「渴愛・取・有」を理解でき、業有の部分理解される。未来世の業果である「生・老死」を理解することによって、現在世の業果である生有が理解されるという。また、二十行相の縁起説では、生有の五支に「生・老死」が含まれるという。このことから二十行相では、業有と生有の限りない繰り返しを示すために、「生・老死」を省略していると推測できるのではないだろうか。

¹³ 二十行相の縁起説は、Vism.や VibhA. (*Vibhaṅga-Aṭṭhakathā*) においても受け継がれているという。Cf.浪花 [2008 : 341]

¹⁴ 名和 [2018 : 54] は、名色の解釈を註釈から「名色が okkanti の動作主を指す」として、「名色が母胎に入っていく」と解釈されていると指摘する。

¹⁵ 浪花 [2008 : 339-341] は、この二十行相による縁起解釈に関して、苦蘊の生起消滅の方法を示すものであった初期仏教の縁起説を、業有 (kamma-bhava) → 「起有」 (upapatti-bhava) の無限の繰り返しを示す縁起説にしたと述べている。

¹⁶ 馬場 [2003a: 24, n2] によると、Vism.の十二支縁起説は、縁起支解釈を Vibh.から、二十四縁説を『発趣論』 (*Paṭṭhāna*) から、二十行相を Pts.から、それぞれ採用しているという。

¹⁷ Cf. 馬場 [2003a]、[2003b]

¹⁸ [Vism XVII : 448, 27-28]

tattha, puññāpuññāneñjābhisankhārā tayo, kāya-vacī-cittasankhārā tayo ti ime cha avijjāpaccayā sankhārā.

[和訳]

ここで、福・非福・不動行の三、身・語・心行の三、以上のこれら六〔種〕が無明を縁とする諸行である。下線部は、PTS 版 [Vism : 526, 33-34] には見られない。

¹⁹ 「識」支分の解釈は、六識に加えてパーリ独自の異熟識と定義されており、それについては本文で後述する。

²⁰ [Vism XVII : 477, 15-17]

nāman ti ārammaṇābhimukhaṃ namaṇato vedanādayo tayo khandhā. rūpan ti cattāni mahābhūtāni catunnañ ca mahābhūtānaṃ upādāyarūpaṃ.

[和訳]

名とは所縁に向かつて曲がるから〔名である。〕受などの三蘊である。色とは四大種と四大種所造色である。

非福・不動行²¹が生じると説かれており、諸行は業として解釈されている。つまり、「諸行（業）を縁として識・名色（諸蘊²²）あり」と解釈される。このように Vism.慧地品の縁起説は、Vibh.の縁起支解釈を採用し、転生を業と異熟の関係で解釈している。

2. Pts.趣論に説かれる輪廻説

Pts.趣論は有情の輪廻転生を扱っており、三界の転生にいかなる因があるのかを説明している

²³. 本章では趣論において輪廻がどのように説かれているかを、「欲界善趣の智と相応する場合」を一例として取り上げる。

²¹ [Vism XVII : 461,5–27]

evam imesu catuvisatiyā paccayesu ayam avijjā

paccayo hoti puññānaṃ duvidhā 'nekaḍḍhā pana paresaṃ, pacchimānaṃ sā ekadhā paccayo matā ti.

tattha puññānaṃ duvidhā ti, ārammaṇapaccayena ca upanissayapaccayena cā ti dvedhā paccayo hoti. …中略…
anekadḍhā pana paresan ti apuññābhisaṃkhārānaṃ anekadḍhā paccayo hoti. …中略…pacchimānaṃ sā ekadḍhā paccayo matā ti āneñjābhisaṃkhārānaṃ upanissayapaccayen' eva ekadḍhā paccayo matā. …後略.

[和訳]

このように、これら二十四縁の中、この無明は

諸福〔行〕に対して二種に、また、他に対して多種に縁となり、

それ（無明）は最後に対して一種の縁であると考えられる。

そこで、諸福〔行〕に対して二種とは、所縁縁・親依縁として二種の縁となる。…中略…また、他に対して多種にとは、非福行には多種の縁となる。…中略…それ（無明）は、最後に対して一種の縁であると考えられるとは、不動行には親依縁としてのみの一種の縁であると考えられる。…後略。

²² 馬場 [2003a : 20–21] は、Vism.の「識・名色」支解釈が無色有・無想有を含む点（Vism : 478,24–25）から「諸行→諸蘊」と定義づけている点が、Vibh.の「諸行→五蘊」とする解釈との相違点であると指摘している。また、「諸行」は「過去の業による今世における結生の条件」と理解されていることから、「〔諸蘊〕は「再生」を含意しているといひ、「業→再生」という関係が成立しているのである。」と述べている。

林寺 [1998 : 135–136] は、Vism.の「名色」の解釈を『法集論』（*Dhammasaṅgani*）の解釈と比較して論じている。『法集論』では、名色の名を「受想行識の非色四蘊及び無為界」と解釈する。対して Vism.や Vibh.では、「識→名色」の名を「受想行の非色三蘊」と解釈していると指摘する。その理由として、「注釈 Pm. は、縁と縁生法を混合しないで示すためであるといひ、VibhA.は二心俱在の誤りに陥らないようにするためであるという。」と註釈を挙げ解説している。さらに、三輪轉説では「識→名色」の識支は異熟輪廻に属するにもかかわらず異熟識と非異熟識がある点に関して、無想有情を想定しているので非異熟識も因となることを説いている点（Vism XVII : 479,34–480,3）を紹介している。

このように、Vism.の「識→名色」の解釈に関しては先行研究でも問題となっている。本発表では、これらの問題には触れず、Pts.との縁起支解釈の比較にとどめる。

²³ [Pts VI : 72,1–7.]

gatisampattiyaññāpasampayutte katināṃ hetūnaṃ paccayā upapatti hoti? khattiyamahāsālānaṃ brāhmaṇamahāsālānaṃ gahapatimahāsālānaṃ kāmāvacarānaṃ devānaṃ ñāpasampayutte katināṃ hetūnaṃ paccayā upapatti hoti? rūpāvacarānaṃ devānaṃ katināṃ hetūnaṃ paccayā upapatti hoti? anūpāvacarānaṃ devānaṃ katināṃ hetūnaṃ paccayā upapatti hoti?

趣への到達には、智と相応している者において、いずれの諸因の縁から転生があるか。王族の資産家・婆羅門の資産家・居士の資産家・欲界天（という趣への到達）には、智と相応している者において、いずれの諸因の縁から転生があるか。色界天（という趣への到達）には、〔智と相応している者において〕いずれの諸因の縁から転生があるか。無色界天（という趣への到達）には、〔智と相応している者において〕いずれの諸因の縁から転生があるか。

趣への到達には、智と相応している者において²⁴、いずれの八因の縁から転生が有るのか。善業の速行²⁵の刹那 (*javanakkhaṇa*) に善の三因があり、〔善の三因が〕その〔速行の〕刹那に生じた思にとつての俱生縁である。それゆえ、善根を縁としても諸行ありと言われる。欣求の刹那 (*nikantikkhaṇa*) に不善の二因があり、〔不善の二因が〕その〔欣求の〕刹那に生じた思にとつての俱生縁である。それゆえ、不善根を縁としても諸行ありと言われる。結生の刹那 (*paṭisandhikkhaṇa*) に無記の三因があり、〔無記の三因が〕その〔結生の〕刹那に生じた思にとつての俱生縁である。それゆえ、名色を縁として識ありとも、識を縁として名色ありとも言われる²⁶。

ここでは、善業の速行の刹那に「善根を縁として諸行あり」、欣求の刹那に「不善根を縁として諸行あり」、結生の刹那に「名色を縁として識あり、識を縁として名色あり」というように縁起支を用いて転生が説明されている。「善根・不善根を縁として諸行あり」は Vibh に確認され、無明の代わりに善根・不善根を用いて十二支縁起を展開している²⁷。また、結生の刹那で取り上げられる「名色を縁として識あり」、「識を縁として名色あり」は、文脈から「識」は結生識、「名色」は五蘊（四無識蘊）を想定できる。換言すれば、五蘊→結生識→五蘊を想定できる。両者の関係性は、『大因縁経』（DN,15 *Mahānidāna-suttaṇṭa*）に代表される九支縁起説の「名色」と「識」の関係性と類似している²⁸。

²⁴ [PtsA : 570,12-14]

nāṇasampayutte 'ti nāṇasampayuttapaṭisandhikkhaṇe. Khaṇo 'pi hi nāṇasampayuttayogena ten' eva vohārena vutto 'ti vedittabbo.

〔和訳〕

智と相応している者においてとは、智と相応している者の結生の刹那においてである。なぜなら、刹那もまた智と相応している者と結びついているから、まさに〔智と相応している者という〕その言葉によって説かれたと知るべきである。

²⁵ 清水 [2012 : 230-232. 333n.11, 12] によると、速行はパーリ独自の心作用の一つであり、速行が思業となり果報をもたらすという。速行は七回連続して繰り返し生じ、その回数によって意志が強くなる。第一速行は、現世において果報をもたらす順現法受業となる。第二速行から第六速行までは、未来に機会を得た際に果報をもたらす順後次受業となる。第七速行は来世に果報をもたらす順次生受業となる。また、速行作用を為すときの思 (*cetanā*) が善悪業になるという。

²⁶ [Pts VI : 72,15-24]

gatisampattiyaṃ nāṇasampayutte katamesaṃ aṭṭhannaṃ hetūnaṃ paccayā upapatti hoti? kusalakammaṃssa javanakkhaṇe tayo hetū kusalā, tasmīṃ khaṇe jātaṇṇāya sahaajāpaccayā honti; tena vuccati kusalamūlapaccayā pi saṅkhārā. nikantikkhaṇe dve hetū akusalā, tasmīṃ khaṇe jātaṇṇāya sahaajāpaccayā honti; tena vuccati akusalamūlapaccayā pi saṅkhārā. paṭisandhikkhaṇe tayo hetū abyākātā, tasmīṃ khaṇe jātaṇṇāya sahaajāpaccayā honti; tena vuccati nāmarūpāpaccayā pi viññānaṃ viññānapaccayā pi nāmarūpaṃ.

²⁷ [Vibh : 170,20-173,22] では、無明の代わりに善根が用いられて十二支縁起が説かれる。また、[Vibh : 190,1-192,5] では、無明の代わりに不善根が用いられて十二支縁起が説かれる。

²⁸ 『大因縁経』（DN,15 *Mahānidāna-suttaṇṭa*）の縁起説は、十二支縁起の「無明・諸行・六処」の三支分を欠いており、「老死」より順に「識」まで至り、その後折り返して「名色」から順に「老死」まで至る縁起説である。縁起支分の詳説では、「識→名色」・「名色→識」支分は以下のように説かれる。
「識→名色」 [DN15 : 63,2-5]

上記に対して PtsA では以下のように註釈している。

善業の速行の刹那にとは、過去の生涯において、この世で、三因による結生を生起させる〔善業〕が、また三因による欲界の善業が、速行路において繰り返し生起することによる七回目の速行の刹那において、〔つまり〕転起の時に、という意味である。…中略…欣求の刹那にとは、自らに異熟を与えるべく現前した業について、或いはおなじく現前した業としての業相について、或いは趣相について、生じつつある諸々の〔意思〕が「欣求の刹那において」である。…中略…結生の刹那にとは、その〔過去の〕業によって捉えられた結生の刹那においてである。三因とは、無貪なる無記因・無瞋なる無記因・無痴なる無記因である。その刹那において生じた思にとつてのとは、異熟である無記の思にとつてのである。名色を縁として識ありとは、この場合、その結生の刹那に三異熟因と残りの心所が名であり、心（識）の〔拠り所となる〕対象 (hadayavatthu)²⁹が色である。その名色を縁としても、結生識が生じる。識を縁として名色ありとは、この場合にも名は既に説かれた種類と同様である。しかし、色はこの場合に、有因なる人間の結生を意味しているから、胎児たちには基十〔法〕・身十〔法〕・性十〔法〕というちょうど三十〔法〕の色がある。湿生と化生なる〔処の〕円満なる者には、〔三十の色に加えて〕眼十〔法〕・耳十〔法〕・鼻十〔法〕・舌十〔法〕というちょうど七十の色がある。この説かれた種類の名色が結生の刹那に結生識を縁として生じる³⁰。

viññāṇaṃ va hi Ānanda mātu kucchim na okkamissatha, api nu kho nāma-rūpaṃ mātu kucchimim samucchissathā?
「アーナンダよ、識が母胎に入らなかったとするならば、はたして名色は、母胎の中で育つでしょうか。」
(片山 2004:155)

「名色→識」 [DN15:63,20-23]

viññāṇaṃ va hi Ānanda nāma-rūpe patitthaṃ nālabhissatha, api nu kho āyati jāti-jarā-maraṇa-dukkha-samudaya-sambhavo paññāyethā?
「アーナンダよ、識が名色において根拠を得ることが無かったとするならば、はたして未来に生・老死という苦の集まりの発生は知られるでしょうか。」 (片山 2004:156)

明言はされていないが、「名色」を五蘊、「識」を結生識と解釈している。このように、Pts 趣論に説かれる縁起説と類似した解釈であるといえる。

九支縁起の影響を受けた論書として、説一切有部『法蘊足論』、法蔵部所伝とされる『舍利弗阿毘曇論』、南伝上座部 Vibh. が従来より指摘されている。これらの三論書は、縁起支解釈に『大因縁経』を引用する点や、縁起支解釈から『大因縁経』の影響を受けていると指摘されている。Cf. 林寺 [2004] しかし、これらの論書における転生の支分は「諸行→識」となっており、Pts 趣論とは解釈が異なっている。ただ、上記の三論書は初期論書における輪廻観を研究するうえで非常に有益であり、関連性などは今後の検討課題とする。

²⁹ 水野 [1964b:163] によると、「心基」 (hadayavatthu) はパーリ独自の色法の一つであり、眼識などの五識が眼根などを所依とするように、眼界・意識界が所依とするものが「心基」であるという。無色界には色が存在しないので、「心基」も存在しないという。
浪花 [2008:593] によると、色の分類の中で命根 (jīva-indriya)、団食 (kabalīkāra-āhāra) などと並んで心基 (hadaya-rūpa) が挙げられている。このように、転生に関わるような特殊な色法となっている。

³⁰ [PtsA:571,4-38]

註釈を踏まえて趣論の内容をまとめると、

- ・ 善業の速行の刹那は、過去世における行為（業）であり、速行路において現世・来世以降に果報をもたらす（取果）行相を指している。
- ・ 欣求の刹那には、自らに異熟を与えるべく（与果）現れた業相（*kammanimitta*）・趣相（*gatinimitta*）が説かれている。この二相は、臨終の際に現れる業であり、臨終しつつある者の最後の認識対象になるという³¹。
- ・ 結生の刹那は、過去世の業の果報として現在世に生じた刹那を指している。

このように PtsA によると、輪廻に関わる刹那では、あらゆる心作用や業の因果関係によって輪廻が成立していることが示されている。

次に、結生の刹那に説かれる「名色」と「識」の関係について PtsA をまとめると以下のようになる。

- ・ 識は結生識と解釈されている。
- ・ 名色を縁として生じる結生識は、名が三異熟因と残りの心所であり、色は心（識）の拠り所となる対象（*hadayavatthu*）とされ色法を指している。
- ・ 結生識を縁として生じる名色は、名が三異熟因と残りの心所であり、色が基・身・性・眼・耳・鼻・舌の各十法とされている。

両者における「名」の解釈は「三異熟因と残りの心所」とされ、三異熟因に関しては、無貪・無瞋・無痴の異熟因と思われるが、その指す内容は明瞭ではない。しかし、名が心所法を指すと説かれていることから、ここでの名は五蘊の受想行などの心所を指していると考えられる。

「色」の解釈について「名色を縁として結生識あり」の際には、「色」は心・識の所依となる認識対象の色を指している。色が色法として解釈され、名は心所であることから、名色が五蘊と

kusalakammasa javanakkhaṇe 'ti atitajātiyā idha tīhetukapaṭisaṇḍhijjanakassa tīhetuka-kāmvācara-kusalakammasa ca javanavīthiyaṃ punappunam uppativasena sattavāraṃ javanakkhaṇe, pavattanakāle 'ti attho.... 中略... **nikantikkhaṇe** 'ti attano vipākaṃ dātuṃ paccupaṭṭhitakamme vā tathā paccupaṭṭhitakammena kammanimitte vā, gatinimitte vā, uppajjamānānaṃ nīkantikkhaṇe.... 中略... **paṭisaṇḍhikkhaṇe** 'ti tena kammena gahitapaṭisaṇḍhikkhaṇe. **tayo hetū** 'ti alobo abhāyāhetu, adoso abhāyāhetu, amoho abhāyāhetu. **tasmīṃ khaṇe jātacetanāyā** 'ti vipākābhāyākatācetanāyā. **nāmarūpapaccayā viññānaṃ** 'ti ettha tasmīṃ paṭisaṇḍhikkhaṇe tayo vipākāhetū sesacetasikā ca nāmaṃ, hadayavatthu rūpaṃ, tato nāmarūpapaccayato 'pi paṭisaṇḍhivīññānaṃ pavattati. **viññānapaccayā nāmarūpaṃ** 'ti etthā pi nāmaṃ vuttappakāraṃ eva, rūpaṃ pana idha sahetukamanussapaṭisaṇḍhiyā adhippetatā gabbhaseyyakānaṃ vatthudasakaṃ, kāyadasakaṃ, bhāvadasakaṃ 'ti samatīṃsa rūpāni; saṃsedajānaṃ opapādikānaṃ ca paripuṇṇāyatanānaṃ cakkhudasakaṃ, sotadasakaṃ, ghāradasakaṃ, jivhādasakaṃ cā 'ti samasattatā rūpāni. taṃ vuttappakāraṃ nāmarūpaṃ paṭisaṇḍhikkhaṇe paṭisaṇḍhivīññānapaccayā pavattati.

³¹ 林 [2003] は、パーリ聖典における「臨終業」の用例をまとめ、パーリ聖典と註釈文献における用例を比較している。臨終業に関して、「臨終業による生天を単なる神秘表現ではなく、認識の問題として教理的に説明する態度が註釈文献には窺える。つまり、過去に行った業、その行為の象徴的な事物である業相（*kammanimitta*）、或いは来世を象徴する事物である趣相（*gati-nimitta*）が、死ぬときに現れ、認識経路に入って最後の認識対象になる。」と述べている。

して解釈されている。つまり、過去世の五蘊を縁として現在世の結生識が生じるということである。

次に、「結生識を縁として名色あり」の際には、「色」は基・身・性・眼・耳・鼻・舌の各十法と註釈されている。浪花[2008:154-156]によると、これらの色の分類は色聚(rūpa-kalāpa)といい³²、個々の存在を成立させる構成要素を指すという。このことから、色は身体の構成要素を指しているの、ここでも名色は五蘊を指しているといえる。つまり、結生識を縁として現在世の五蘊が生じることが説かれている。このように、「名色」と「識」の関係性は、過去世の五蘊を縁として現在世の結生識が生じ、現在世の結生識を縁として現在世の五蘊・四無識蘊が生じることを指している。

本章では、Pts.趣論に説かれる輪廻説に関して註釈を参考に考察した。Pts.趣論では、転生に関わる刹那を取り上げており、註釈ではその刹那にどのような作用があつて転生が成立するかが説明されている。さらに、結生の刹那で取り上げられていた「名色」と「識」の関係は、九支縁起説に説かれるような関係性で転生が説かれている。さらに、註釈によれば、過去世の五蘊を縁として現在世の結生識が生じ、現在世の結生識を縁として現在世の五蘊・四無識蘊が生じると解釈されている。

第1章で考察したPts.の二十行相の縁起説は、業有と生有の繰り返しによる有情の限りない輪廻を示していた。「識」を結生識と解し、五蘊が転生していくという観点では同一の輪廻説といえるが、Pts.趣論では九支縁起を想定できる縁起説を基にしていたため、二十行相の縁起説を輪廻説にあてはめたとはいえない。このように、Pts.の輪廻説では業の異熟として結生識を説くことで五蘊の転生を説いている。

3. Vism.慧地品に説かれる輪廻説

第2章では、Pts.趣論が輪廻をテーマとし、結生の刹那に「名色」と「識」支分の関係で五蘊の転生を示していることを指摘した。Vism.慧地品では、同様の文脈が十二支縁起の「諸行」と「識」支分で説かれる。

はじめにVism.慧地品の「諸行を縁として識あり」における識支分の解釈を示す。

³² 浪花[2008:154-156]によると、色聚(rūpakalāpa)とは、個々の存在を成立させる構成要素を指す。中でも、存在を成立させる最小の構成要素を「不簡別色(avinibhoga-rūpa)」といい、地・水・火・風の四大種と色(varaṇa)・香・味・養分(oja)の八種が基本となっている。そして、眼・耳などのそれぞれに対応して項目が増える。例えば、眼十法であれば、基本となる八種に眼と命根を加えたものを指す。本文で挙げた七種の十法は、業生の色聚と分類されている。また、「不簡別色」は、有部の「八事俱生色」と同様の考え方とされるが、相違点として構成要素の中の養分(oja)が八事俱生説では触となっている点が挙げられる。

「行を縁として識あり」という句において、識とは眼識などの六種である。その中、善の異熟と不善の異熟を有する二種の眼識がある。耳・鼻・舌・身識も同様である。意識は、善不善異熟の二眼界、三無因意識界、八有因欲界異熟心、五色界〔異熟心〕、四無色界〔異熟心〕、以上の二十二種がある。以上、これら六識より、乃至全三十二の世間異熟識が構成された。しかし、出世間〔識〕は、輪廻説と結合されないので採用されない³³。

このように諸行を縁として生じる識は、眼識などの六識と説かれ、意識が詳細に分類される。五識は、善不善の異熟（10）が説かれる。意識は、善不善の異熟意界（2）・三無因異熟意識界（3）・八有因欲界異熟心（8）・五色界異熟心（5）・四無色界異熟心（4）が説かれる。第1章で検討した縁起説で、諸行は業を指していたことから、これらの三十二異熟識は³⁴、業の異熟として生じる識であることが示されている。このことから、慧地品では行（業）によって三界へと生じる異熟識が定められていることになる。また、出世間識が採用されない理由としては、八輩の者は生死の回数が限定されており、輪廻の苦しみを超越しているからであろう。

次に、Pts.趣論の輪廻説と類似する記述の一例として「欲界善趣において悪業を為した者の転生」の在り方を取り上げる。

まず、欲界の善趣に生存している悪業を有する人（puggala）には、「これらの〔悪業〕が、そのときに、彼に依存する。³⁵」などという言葉から、死の床に横たわる者には、積み重ねたそのままの悪業、或いは業相が意門³⁶に現れる。その〔業相〕を捉えて生じた、彼所縁で終結する速行路（javanavīthi）の直後に、有分の対象を所縁として死心が生じる³⁷。その〔死心〕が滅した時に、まさにその現れた業、或いは業相を捉えて、断絶していない煩惱の力によって向わされた悪趣に属する結生心が生じる。これが、過去を所縁とした死〔心〕の直後に〔転起する〕過去を所縁とする結生である³⁸。

³³ [Vism XVII : 465,22-30.]

sāṅkhārappaccayā viññāṇa-pade, viññāṇan ti cakkhuvīññāṇādi chabbidharṇ. tatha cakkhuvīññāṇaṇ, kusala vipākāṇ akusalavipākāṇ ti duvidharṇ hoti ; tathā sota-ghāṇa-jivhā-kāyaviññāṇāni. manovīññāṇaṇ, kusala kusala vipākā dve manodhātuyo, tisso ahetukamanovīññāṇadhātuyo, aṭṭha sahetukāni kāmāvacaravipākacittāni pañca rūpāvacarāni, cattāri arūpāvacarāni ti bāvisatvīdharṇ hoti. itī imehi chahi viññāṇehi sabbāni pi battiṇṇa lokiyavipākaviññāṇāni saṅgahitāni honti. lokuttarāni pana vatṭakathāya na yujjantī ti na gahitāni.

³⁴ 三十二異熟識は、パーリ独自の八十九心識の一部である。八十九心識に関しては、水野 [1964b] を参照されたい。また、諸行と異熟識の関係性は Vism : [466,8-467,16.] に詳説される。

³⁵ MN III,129Bālapandita-suttan. [164,37-38.]

³⁶ 水野 [1964b : 852] によると、意門は顕現的心作用の中で、意識を通じて行の認識・思惟・作業を指す。

³⁷ 水野 [1964b : 945] によると、有分と死心は同じ所縁を持つという。

³⁸ [Vism XVII : 468,6-15]

kāmāvacarasugatiyaṇ tava ṭhitassa pāpakammīno puggalassa, “tāni 'ssa tasmiṇ samaye olambantī” ti ādivacanato maraṇamañice nīraṇassa yathūpacitaṇ pāpakammāṇ vā kammanimittāṇ vā manodvāre āpātham āgacchati. taṇ

ここで説かれた速行・彼所縁・死心はパーリ独自の心作用³⁹であり、八十九心識に伴って作用するといわれる。ここでの記述をまとめると以下のようになる。

- ・ 欲界の善趣において悪業を為した者は、積まれた悪業・業相を死の直前に認識する。
- ・ 悪業相を認識し、それによって速行心が作用し、その直後に死心が生じる。
- ・ その死心が滅した時に、意門に現れた悪業相を捉えて、悪趣に属する結生心が生じるといふ。

ここでは、死の直前に業相を認識することで、それによって異熟をもたらす業が生じるという。さらに、その業を認識することで次の生への結生心が生じると説かれている。ここでは、死心→結生という順で結生心が説かれている点や他の心作用が説かれている点から、結生心は結生作用を指していると考えられる。つまり、過去世の業によって、六識が異熟識として生じ、業を認識することで結生作用によって現在世に生じることになる。

このように、Vism.慧地品では「諸行」と「識」支分において、パーリ独自の心作用をもって輪廻説を説く。Vism. と Pts.両者の類似点として、心作用が用いられる記述が挙げられ、PtsA ではさらに Vism. との類似点が増える。その点に関しては、PtsA が Vism. の影響を受けており、それに従った可能性が考えられる。しかし、「名色」と「識」の関係で転生を説く記述は Pts.趣論自体に説かれるので、転生を説明している支分に違いがあるといえる。この相違点は、Vism.が「識」の縁を「諸行」としている点から生じ、それによって「識」支分を異熟識と解釈しているのである。それに付随して、結生を担うものが結生識ではなく、結生作用という心作用となっている。

4. Vism.慧地品に説かれる無我輪廻の構造

第3章では、Vism.慧地品における Pts.趣論と類似した記述を取り上げ、Vism.慧地品では業と異熟識という関係で転生が説かれている事を指摘した。Vism.慧地品の「諸行を縁として識あり」の総説では、第3章で考察した転生の行相が、心識論などを用いずより具体的に説かれる。そこ

ārabha uppannāya tadārammaṇapariyosānāya javanavīthiyā anantaram bhavanga : ayaṃ ārammaṇaṃ katvā cuticittaṃ uppajjati. tasmīṃ niruddhe tad eva āpāhagataṃ kammaṃ vā kammaṇimittaṃ vā ārabha anupacchinna-kilesabalavinamitaṃ duggatipariyāpannaṃ paṭisandhiccittaṃ uppajjati. ayaṃ atitārammaṇāya cutiyā anantara atitārammaṇā paṭisandhi.

³⁹ 水野 [1964b: 847-874]、清水 [2012: 320-322]

①結生 (paṭisandhi) ②有分 (bhavaṅga) ③引転 (āvajjana) ④見 (dassana) ⑤聞 (savana) ⑥嗅 (ghāyana) ⑦嘗 (sāyana) ⑧触 (phusana) ⑨領受 (sampaṭicchana) ⑩推度 (saṅtirāṇa) ⑪確定 (voṭṭhāpāna) ⑫速行 (javana) ⑬彼所縁 (tadārammaṇa) ⑭死 (cuti) が十四心作用である。

これら十四心作用の中で、①結生②有分④死心の三種が潜在意識の働きを指し、それ以外は顕現的な心作用を指す。特に②有分は、過去世の業の異熟心とされ、①結生④死心を除く無意識状態において働いている。また、人間が生死輪廻を続けている間は、滅尽定や無想定を除いて常にこの十四心が相続される。

で本章では、その総説を取り上げ、どのようにして無我輪廻を成立させるのかを考察していく。
慧地品の輪廻転生に関する総説は以下のように説かれる。

このように、この既に縁を得た存在のみが異なる生存に至る。

その〔縁を有する〕者が、そこ（過去）より移動することはないし、因なしにそこ（過去）から〔生じる〕のではない。

実に、このように、既に縁を得た色・非色なる存在のみが生じつつ、異なる生存に至ると言われる。有情が〔至る〕のではない。命が〔至る〕のではない。またそれが過去の生存からここ（現在）へ移動することはないし、また因なしにそこ（過去）からここ（現在）へ現れるわけでもない。このことは、共通認識である人の死没と結生の順序によって明瞭になるだろう。実に、過去の生存において、自然に或いは治療によって死に到達した者は、全ての肢体の関節のつなぎ目を切断するという耐えがたい瀕死の苦痛をもたらす諸々の剣が振り下ろされることに耐えられず、〔まるで〕灼熱に投げ捨てられたターラの青葉のように、順番に身体が乾燥していき、眼などの諸根が減し、心（識）の〔拠り所となる〕対象のみが留まった身根・意根・命根がある時に、その刹那に残った心（識）の〔拠り所となる〕対象を依処とした識が、「重（garu）」・「修習（samāsevitā）」・「近（āsanna）」・「宿作（pubbakata）」のうちのいずれかの行と称される残りの縁によって捉えられた業を⁴⁰、或いはそれ（業）によって現れた業相・趣相と称される境を捉えて生じる。このように、生起しつつあるその〔識〕を、渴愛と無明が未断であるから、無明によって過失が覆われているその境に渴愛が向かわされ、共に生じた諸行が〔識を境に〕投げる。その〔識〕は、相続として渴愛によって向かわされ、諸行によって投げられ、此岸の樹に縛られた縄に懸かって水路を超えていくように、前の依り処を捨て、業によって生じた後の依り処を味わいながら、或いは味あわずに、所縁などの縁によって同様に生起するという。

⁴⁰ [Vism XIX : 601,15-25.]

aparam pi catubbidham kammaṃ: yaṃ garukaṃ, yaṃ bahulaṃ, yaṃ āsannaṃ, kaṭattā vā pana kammaṃ ti. tattha kusalaṃ, vā hotu akusalaṃ vā garukāgarukesu yaṃ garukaṃ mātuḥhātādi kammam vā mahaggatakammaṃ vā, tad-eva paṭhamam vipaccati. tathā bahulā bahulesu pi yaṃ bahulaṃ hoti susilyam vā dussilyam vā, tad eva paṭhamam vipaccati. yaṃ āsannaṃ nāma maraṇakāle anussaritakam mam; yaṃ hi āsannamarapaṇo anussarituṃ sakkoti, ten'; eva uppajjati. etehi pana tīhi muttam punappuna laddhāsevanam kaṭattā vā pana kammaṃ nāma hoti; tesam abhāve tam paṭisandhim ākaḍḍhati.

訳：清水 [2017 : 334]

さらに、重（garuka）・多（bahula）・近（āsanna）・已作（kaṭattā）の四種の業がある。(1)その中で、善あるいは不善があろうとも、重と非重の中では、母殺しなどの業、あるいは上位に属する業（mahaggatakamma）といった重〔業〕が第一に異熟する。(2)同様に、多と近の中では、善性であれ悪性であれ多〔業〕が第一に異熟する。(3)近〔業〕とは、死時に隨念された業である。実に死時に近いものが隨念することの出来たところのそれ（業）によって、彼は生まれる。(4)しかし、これら三つを離れて再三再四得られた習行が已作（kaṭattā）業と呼ばれる。これら、〔重業・多業・近業の三つ〕が存在しないならば、それ（已作業）は結生を引く。Cf.浪花 [2004 : 325,n1] 宿作業（pubbakata）は已作業（kaṭattāvāpanakamma, kaṭattā-kamma）とも呼ばれる。

またここで、前に死没するから死没である。後に次の生存などに結生するから結生と言われる。これは前の生存からここ（現在）へ来るのではないし、ここ（過去）から業・行に向けられた境などの因なくして、現れることはないと思われるべきである⁴¹。

Vism.慧地品に説かれる輪廻説は、以下のようにまとめられる。

- ・ 縁を得た色・非色なる存在のみが次の生存に至る。
- ・ 転生は、有情（satta）、命（jīva）が過去世から現在世に至るのではない。
- ・ 因なくして現在世に生じることはない。
- ・ 人は臨終に際して、身根・意根・命根を残した識が、「重（garu）」・「修習（samāsevitā）」・「近（āsanna）」・「宿作（pubbakata）」のいずれかの業・業相・趣相を認識対象（境）として生じる（根・境・識三事相合）。
- ・ そこで生じた過去世の識は、無明と渴愛による諸行によって前の依処から投げ出される。そして現在世の識は、業によって生じた後の依処を認識対象として生じる。

縁を得た色と非色なる存在とは、無色有情や無想有情を指すと考えられ、五蘊のみならず四無色蘊の者などの転生も含んでいる⁴²。また、転生の主体を有情・命が相続すること、無因による生起を否定している。つまり、転生の縁を持つ五蘊（諸蘊）が転生していくことになる。また、転生の行相が示されており、「重（garu）」・「修習（samāsevitā）」・「近（āsanna）」・「宿作（pubbakata）」の四つの業が挙げられている。これらの業は、一般的な業よりも影響力が大きく、優先的に異熟を起こすとされている。さらに、死の間際に異熟をもたらす業・業相・趣相が現れ、それを認識対象として識が生じるという。即ち、ここでの説明でも識は識体としての識ではなく、六識などの認識主体を指している。

⁴¹ [Vism XVII : 472,31—473,21]

**laddhappaccayaṃ itī dhammamattam etaṃ bhavantaram upeti,
nā 'ssa tato sankantī, na tato hetuṃ vinā hotī.**

itī h' etaṃ laddhappaccayaṃ rūpārūpadhammamattam uppajjamānaṃ bhavantaram upeṭī ti vuccati, na satto, na jīvo, **tassa ca nāpi** aññābhavato **idha sankantī** atthi, **nāpi tato hetuṃ vinā** idha pātubhāvo. tayaṃ pākācena manussacutipaṭisaṅkhikkamena pakāsayissāma. aññābhavasmiṃ hi sarasena upakkamena vā samāpannamarāssa asayhānaṃ sabbaṅga-paccanga-sandhibandhanacchedakānaṃ mārāṇāntikavedanāsathānaṃ sannipātaṃ asahantassa, ātape pakkhittaharitatālapaṇṇam iva kamena upasussamāne sarīre, niruddhesu cakkhādisu indriyesu, hadayaavatthunafte paṭiṭṭhesu kāyindriya-manindriya-jvītinidriyesu, taṅkhaṇāvasesa-hadayaavatthusanissitaṃ viriṇṇaṇaṃ garu-samāsevitāsannapubbakatānaṃ aññataraṃ laddhāvesappaccaya-sankhārasankhātaṃ kammaṃ, tadupaṭṭhāpitaṃ vā kammanimitta-gatinimittasankhātaṃ viṣayaṃ ārabha pavattati. tad evaṃ pavattamānaṃ taṇhāvijjānaṃ appahinattā avijjāpaṭichāditādinave tasmiṃ viṣaye taṇhā netaṃ, sahaṇāsaṅkhārā khipantī. taṃ santativasena taṇhāya namīyamānaṃ, saṅkhārehi khipamānaṃ, oramattarukkhavinibandharajjūṃ ālambitvā mātikāṭikkamako viya, purimaṃ ca nissayaṃ jahati, aparaṃ ca kammaṣamutthāpitaṃ nissayaṃ assādayamānaṃ vā anassādayamānaṃ vā ārammaṇāññi yeva paccayehi pavattati ti.

ettha ca, purimaṃ cavanato cuti, pacchimaṃ bhavantarādi-paṭisaṅkhānato paṭisaṅkhī ti vuccati, tad etaṃ nāpi purimabhavā idh' āgataṃ, nāpi tato kamma-sankhāra-nati-visayādi hetuṃ vinā pātubhūtaṃ ti veditaṃ.

⁴² 註22 参照

このように、五蘊の転生の中でも認識主体となる識が転生を担っており、過去世に業を認識して生じた識と現在世に結生する識が同一であるというように説かれている。しかし、このような解釈は、初期仏教以来の無我思想に反する。Vism. 慧地品では、上記の引用に続いて、相続の主体について以下のように論述している。

また、ここで山彦などが例えとしてあるだろう。

相続が連結していくから、同一でも別異でもない。

またここで、この識が前の生存からここに来るのではなく、過去の生存に所属する諸因によって生じるのであれば、山彦・灯火・印章・鏡像などの種類の存在が例えとしてあるだろう⁴³。なぜなら、例えば、山彦・灯火・印章・鏡像は、声などの因があり、〔その因が〕他所に行かなくても〔山彦などは〕あるように、このようにこの心もまさにそうである。また、相続が連結していくから、同一でも別異でもない。なぜなら、もし相続の連結があるときに、完全に同一であるならば、乳より酪が生じる事は決してない。さらにまた、完全に別異であるならば、酪が乳を所有するということも決してない。これが因によって生起するすべてのものにおける道理である。また、このようであるならば、すべての世間の名称は除かれたものとなるだろう。しかし、それは好ましくない。それゆえ、ここでは完全に同一、或いは別異であるとしてはいけない⁴⁴。

ここでは、先述した同一の識が転生を担うのかという問題に対して、山彦や乳の例えを挙げて相続を説明している。山彦などの例えは、その場に実体はなくても因があることによって存在するものが挙げられており、過去世の識と現在世の識との関係も同様であると説いている。つまり、識が過去世から現在世に移動するのではなく、業因によって識が現在世に生じることを説いている。相続主体に関しても、相続の同一と別異を乳と酪の関係を例えとしている。相続が同一であれば乳と酪は異なるものなので成立せず、別異であれば酪が乳を有することはないという。相続においても同様で、過去世の諸蘊と現在世の諸蘊は同一でも別異でもないことが比喻によって示

⁴³ 龍樹著『因縁心論』にも同様の比喻が用いられるが、本発表では触れず今後の検討課題としたい。

⁴⁴ [Vism XVII : 473,22-34.]

siyup nīdassanān' ettha paṭighosādikā, atha
santānabandhato n' atthi ekatā nāpi nānatā.

ettha c' etassa viññāssa purimabhavato idha anāgamane attābhavapariyāpannahetūhi ca upāde paṭighosa-paḍīpa-mudda-paṭibimbappakārā dhammā nīdassanāni siyup, yathāhi paṭighosa-paḍīpa-muddā-chāyā saddādīhetukā honti, aññāta agantvā honti, evaṃ eva idaṃ cittaṃ. ettha ca santānabandhato n' atthi ekatā nāpi nānatā. yadi hi santānabandhe sati ekantaṃ ekatā bhavēyya, na khīrato dadhi sambhūtaṃ siyā; athāpi ekantaṃ nānatā bhavēyya, na khīrasāmino dadhi siyā. esa nayo sabbahetusaṃupparmesu. evaṃ ca sati sabbaloka vohāralopo siyā, so ca aññiṭṭho; tasmā ettha na ekantaṃ ekatā vā nānatā vā upagantabbā ti.

されている。

このことから、Vism.慧地品では、転生していくものは縁を持つ五蘊（諸蘊）であり、業や次の境涯を認識する識がその中心となっている。しかし、識が転生を担うのではなく、識が業因によって次の境涯へと生じる。つまり、業と異熟の関係によって転生を説明している。また、第3章で考察した心作用との関係性から、Vism.では業の異熟としての識が、心作用の一つである結生作用によって次の境涯に生じると説くことで無我輪廻を説明している。

まとめ

Vism.慧地品と Pts.趣論に説かれる輪廻は、縁起説と関連付けて説かれるが、転生に関わる縁起支分に相違があった。そこで本発表では、両者の縁起説の相違点を示し、そのうえで輪廻説を検討した。本稿で検討した点を示せば以下ようになる。

- ・ 両者の結生に関わる縁起支解釈は、Pts.二十行相では「識＝結生識、名色＝五蘊・四無識蘊」となり、Vism.では「識＝六識乃至三十二異熟識、名色＝諸蘊」となっている。
- ・ Pts.智論の二十行相の縁起説は、業有と起有の繰り返しによる有情（五蘊）の限らない輪廻を示す縁起説である。
- ・ Pts.趣論では、過去世の「名色」を縁として現在世の「識・名色」が生じ、過去世の五蘊により現在世の五蘊が生じるという。
- ・ Pts.趣論の輪廻説は二十行相の縁起説とは異なる縁起説を基にしていると考えられる。
- ・ Pts.智論の二十行相の縁起説と Pts.趣論では、五蘊の転生という観点の中で、異熟となる識支分を「結生識」とする解釈によって転生を説明している。
- ・ Vism.慧地品では、「識」支分は六識乃至三十二異熟識と解釈されており、業の異熟として三界のあらゆる識が生じると説かれている。
- ・ 転生に関しては、その異熟識が結生するのではなく、結生という心作用によって現在世に生じることが説かれる。
- ・ Vism.の輪廻説では、転生の主体や無因による転生を否定し、縁を持つ五蘊が転生していくと説かれている。また、転生していく五蘊は同一でも別異でもないと説明される。

以上のように、Pts.と Vism.では輪廻が縁起説に沿って説明されており、転生が説明される縁起支分に相違があることを示した。特に「識」支分は、Pts.では「結生識」としており、Vism.では「異熟識」としていた。この相違点は、Vism.が Vibh.の縁起説を採用し、それに合わせて輪廻説を再構築したことによると考えられる。つまり、「諸行→識」に転生をあてはめ、「識」支分解釈を「異熟識」としたのである。また、輪廻説では、五蘊の転生を想定している点は共通している。しかし、「識」支分解釈の相違から、Pts.では結生識によって転生を示していたが、Vism.では結生識ではなく心作用を用いることで現在世への結生を説いている。以上のように、縁起解釈が変遷する中で、輪廻説もそれに合わせて再構築されている。

略号

- AN : *Aṅguttara-nikāya* part I. Edited by Richard Morris. Oxford : PTS, 1885. Reprinted 1989. Second edition 1961. Reprinted 1989.
- ANA : *Manorathapūraṇī Buddhaghosa's commentary on the Aṅguttara-nikāya* vol. I. Edited by Max Walleiser. London : PTS, 1924. Second edition 1973.
- DN15 : *Dīgha-nikāya* vol II. Edited by Rhys Davids and Estlin Carpenter. Oxford : PTS, 1903. Reprinted 1995. pp.55—71.
- MNIII.129 : *Majjhima-nikāya* vol III. Edited by Robert Chalmers. London : PTS, 1899. Reprinted 1977. pp.163—178.
- PTS : Pāli Text Society.
- Pṭs : *Paṭisambhidhāmagga* A.C.Taylor, London : PTS, 1905—1907, reprinted. London : PTS, 1979.
- PṭsA : *Paṭisambhidhāmagga commentary (Sakkhamappakāsini)* vol. II, III. edited by C.V.Joshi. London : PTS. 1941—1947. reprinted 1979.
- Vibh : *Vibhaṅga*, edited by C.A.F. Rhys Davids, London: PTS, 1978. reprinted. London: PTS, 1994.
- Vism : *VISUDDHIMAGGA of BUDDHAGHOSĀCARIYA* edited by H.C. Warren, revised by Dharmananda Kosambi, Harvard oriental series, Cambridge / Mass. Oxford university press 1950.
- VRI : Vipassana Research Institute.

参考文献

梶山 雄一

- [1984] 「輪廻と超越—『城邑経』の縁起説とその解釈—」『哲学研究』47,(8): 324—359

片山 一良

- [2004] 『パーリ仏典第二期3 長部 大篇』 大蔵出版

唐井 隆徳

- [2017] 『初期経典における縁起説の展開』（博士学位請求論文）
- [2018] 「十二支縁起の成立と展開—行滅の用例を通して—」『佛教大学仏教学会紀要』23: 43—64

清水 俊史

- [2012] 「パーリ上座部における行為の構造」『佛教研究』40: 319—335
- [2017] 『阿毘達磨仏教における業論の研究—説一切有部と上座部を中心に—』 大蔵出版

浪花 宣明

- [1991] 「パーリ上座部の縁起の語義釈」『仏教研究』20: 81—106
- [2000] 「パーリ上座部の縁起説」『加藤純章博士還暦記念論集アビダルマ仏教とインド思想』

195—207

- [2001] 『新国訳大蔵経 解説道論』 大蔵出版
[2004] 『分別論註 : Vibhaṅgaṭṭhakathā と Vibhaṅgamūlaṭṭhikā』 平楽寺書店
[2008] 『パーリ・アビダンマ思想の研究』 平楽寺書店
[2020] 『パーリ仏教を中心とした業論の研究』 春秋社

名和 隆乾

- [2015] 「パーリ聖典における輪廻と識についての一考察—識の avakkram を中心に—」 『印度学仏教学研究』 63(2): 200—204
[2018] 「nāmarūpassa avakkanti-について」 『印度学仏教学研究』 66(2): 52—57

馬場 紀寿

- [2003a] 「縁起支解釈の展開—上座部大寺派の三世両重因果説—」 『インド哲学仏教学研究』 10: 17—31
[2003b] 「三世両重因果説の成立—上座部大寺派の縁起支定義—」 『印度学仏教学研究』 51(2): 199—201

林寺 正俊

- [1998] 「Visuddhimagga における縁起解釈の一考察—特に異熟支分をめぐる問題—」 『印度哲学仏教学』 13: 131—146
[1999] 「南方上座部における名色の理解について—名と色の相互依存の比喩—」 『印度学仏教学研究』 48(1): 91—93
[2004] 「初期論書における『マハーニダーナ経』の縁起説への影響」 『印度哲学仏教学』 19: 57—71

林 隆嗣

- [2003] 「臨終業について」 『印度学仏教学研究』 52(1): 172—176

平川 彰

- [1976] 「無我と主体—自我の縁起的理解、原始仏教を中心として—」 『自我と無我—インド思想と仏教の根本問題—』 平楽寺書店 381—421

水野 弘元

- [1964a] 「縁について」 『仏教思想史論集』 31—50 大蔵出版
[1964b] 『パーリ仏教を中心とした佛教の心識論』 山喜房仏書林
[1997a] 『パーリ論書研究』 春秋社
[1997b] 『南伝大蔵経第六十四巻 清浄道論三』 大蔵出版 (初版: 1940)

森 章司

〔1995〕『原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究』 東京堂出版

森 祖道

〔1984〕『パーリ仏教註釈文献の研究』 山喜房仏書林

渡邊 照宏

〔1989〕『南伝大蔵経第四十巻 小部経典十八 無碍解道』 大蔵出版 （初版：1935）

〈キーワード〉部派仏教、南伝上座部、『清浄道論』、『無碍解道』、十二支縁起、輪廻

（博士後期課程）